

## Ⅶ 今後の課題

本研究により、特別支援学校（肢体不自由）におけるA T・I C T活用の現状と課題を明らかにした。同時に肢体不自由のある児童生徒にとってのA T・I C T活用のニーズ応えるために、様々な機能を組織的に発揮していく「しくみ」が重要であることが、認められた。具体的な取組を実践報告として、研究協力機関（特別支援学校）が示してくれた。こうした実践事例から、自校でできることを見つけて取り組む特別支援学校が、増えてくることが重要である。学校の組織的な取組が推進される上で有効と思われるツールとして、「教員のA T・I C T活用に関する自己評価と研修ニーズ調査」と「支援技術（A T）活用の自己評価マトリクスー特別支援学校（肢体不自由）版ー」を作成した。研究協力機関での試用から、これらのツールの有効性と課題が明らかになってきた段階である。今後は、これら2つのツールをより多くの特別支援学校で利用してもらい、評価指標の改善や活用方法の工夫などにつなげていくことが課題である。特に、「支援技術（A T）活用の自己評価マトリクスー特別支援学校（肢体不自由）版ー」は、その名の通り特別支援学校（肢体不自由）での活用を想定して開発した。この自己評価マトリクスを基に他の障害種を対象とした特別支援学校におけるバージョンの開発へとつながることも今後の課題である。

もう1つの研究課題である「小・中学校等に在籍する肢体不自由のある児童生徒へのA T・I C Tを活用した指導・支援のための特別支援学校（肢体不自由）のセンター的機能」については、特別支援学校（肢体不自由）側からのセンター的機能の現状を概観できたことと、2つの地域における特別支援学級への相談・支援の事例検討をした。A T・I C T活用の知見は、特別支援学校（肢体不自由）の専門性としてセンター的機能で活用し得る専門性であることは認められた。今後は、さらに広く実践事例を収集し、その効果を発信することで、特別支援学校と小・中学校とのつながりを「見える化」していくことが必要である。そうした実践の積み上げの中から、「継続的な相談や支援」の重要性が認知されることで、継続的支援のための予算や活用できるA T・I C T機器の整備などの充実が図られることが重要であると考えられる。

（長沼俊夫 金森克浩 徳永亜希雄 齊藤由美子）